

さいたま
見沼

よみさんぽ

2020

Vol. 33

まち歩き 1

まちの魅力って何だろう？

～路上観察で見つけるまちのお宝～

記録写真家 柿内未央

まちの魅力って何だろう？

～路上観察で見つけるまちのお宝～

私たちはまちを歩くとき、どんな景色に目を向けながら歩いているでしょうか。馴染み深いわがまちの見慣れた景色も、よく観察するとユニークなもの、おもしろいもの、不思議なものなど、魅力にあふれています。今回は、路上観察からまちのあれこれを発見する楽しさをご紹介します。

路上観察とは

赤瀬川原平氏や藤森照信氏らが1980年代に始めた路上観察学会は、路上観察を学問として調査・研究していますが、まちの中の役に立たない扉や階段などを「超芸術トマソン」というアートとしてとらえたり、どこかユーモラスで遊びの要素がたくさんあるのが魅力です。路上観察は、路上にある全てのものを観察の対象にして、一般的には無用なものに新たな芸術的価値を見出す試みでもあります。

そんな路上観察をさいたま市で始めた人たちがいます。「さいたま路上観察学会」主催者の利根川兼一さんと太田一穂さんのお2人です。路上観察を実際に体験するため、今回は「さいたま路上観察学会 西区編」に参加しながらお話を聞きました。

自分の目と足で路上を観察する

建築関係のお仕事をしている利根川さん。水戸芸術館で開催された、建築家



利根川兼一さん



太田一穂さん

で路上観察学会のメンバーの1人でもある藤森照信さんの展覧会（『自然を生かした建築と路上観察』）に関わり、おもしろいと思ったのが路上観察に興味をもったきっかけだそうです。その後、大宮のコワーキングスペースで写真を講評するイベントに参加していた折、その場にいた太田さんと偶然出会い、2人は意気投合します。

一方の太田さんはIT関係のお仕事をしながら、Web上の地図を共同で作る市民イベント「オープンストリートマップ」などにも参加する、まち歩きと地図の達人です。また、芸術祭にボランティアとして参加するなどアートにも関心が深く、たくさんの市民活動に積極的に参加する中でつながった友人や知人も大勢います。そして商店街の看板の活字フォントなどが大好き。そんな2人が出会い、2017年にさいたま路上観察学会を立ち上げ、ゆったりと活動を開始しました。

最初の回はSNSでお知らせをして、同年7月に大宮駅東口近辺でプレ開催をしてみました。参加者はまちを歩きながら、それぞれが目にとまった何かおもしろいと思ったものを写真に撮ります。文字の剥がれ落ちた看板、建物の間の細い路地に見つけた猫、道路の標識、マンホールの蓋、建物に這う蔦など、気になるものは各人違います。

「まち歩きの後には、その写真をみんなで見せ合って共有すると、同じ道を通っていても観察しているものが1人1人違うことに驚きます」と利根川さん。

利根川さんは現在、生まれ育った岩槻で、もの作りやDIYを気軽に楽しめる工房「Hasikko-lab 工作室」を運営しています。自分の手で作ることを体験することで、ものの価値観を変えたいと話します。自分の目と足でまちを観察し発見する路上観察にも通じるところがありそうです。

太田さんは「実際に歩いてみると、道路1つ隔てただけでまちの感じが違ってくるポイントがある。よく『浦和 vs 大宮』などと言われているけれど、駅の東口と西口でも違う。それは例えば半径500mの生活圏なのか、もしかしたら昔の村なんかに由来してるのかも、と妄想が広がります」と、「カステラ石」と名付けた縁石ブロック



数字を集める

南区・南浦和近辺(2019)



街を歩くと、数字に出くわす。番地だったり、屋号だったり。軽い気持ちで始めるとなかなか揃わず後悔する。この日も6だけが揃わず後日か…と、武蔵野線のホームで空を仰いだら、そこは6番線だった。

Saitama Street Observation Society

まちの歴史や文化の来歴に思いをはせます。

まちの見方が変わる

今回の路上観察では、JR 指扇駅を出発点に、珍しいカタカナ地名の「プラザ」地区を目指すことにしました。それ以外に決まっていることはなく、足のむくままに歩きます。

今日の参加者は8名。初めて

参加した人も3名いましたが、歩きながらあつという間に打ち解けて話がはずみます。

道路脇の馬頭観音や道端のブロック塀、道路標識、昭和レトロな商店街の風景など、参加者1人1人の感性でまちのお宝を見つけ、思い思いにシャッターを切っていきます。公園の遊具を観察したついでに試しに遊んでみたり。道草をたくさんしながら、この日は2時間ほど探索しました。

「実際に路上観察をしてみると、まちを見る目が変わりました。いろいろなところに自然に目がいくようになりました」と利根川さんは話します。

参加した人もその魅力を「普段の生活では、ひたすら目的地に向かって歩くだけだし、つい最短距離の同じ道を選んでしまう。路上観察の後には、いつもは注目していなかったところに気が付くようになりました」と語ります。

車や自転車ですーッと通り過ぎていると見過ごしてしまう景色でも、ゆっくりじっくり足を止めて観察すると、昔から変わらずにそこにあった何かを発見できるのです。

路上観察はコミュニケーション

路上観察の楽しさは、1人ではなくみんなで観察することにもあります。参加者は写真が趣味の人、建築やまちづくりの専門家、マンホールなど自分なりの好きなテーマを持っている人、地形や境界などの分野のまち歩きにも積極的に参加している人……いろいろな人がSNSでの呼びかけで集まります。参加の理由も人それぞれです。中には、参加している人がおもしろいから、という人も……。

参加した人のお話を聞くと、「私は素直におもしろいなって思ったものを撮っています。路上観察は私にとってはコミュニケーション。参加した人たちと一緒にするのが楽しい」、また、参加者の中に建築に詳しい人がいたり、まちで出会った人がその地域の歴史を教えてくれることもあります。「自分が暮らしている場所にこんな素晴らしいものがあつたんだ、この地名にはそんな由来があつたんだと教えてもらったり、いろいろな発見があります」と言う人もいました。

一緒に路上を観察しよう！

「路上観察の楽しさは、ただ写真を撮るだけではなくて、その写真にちょっとしたコメントをつけることで、その人がどんな風にその景色を見たのかが感じられること。コメントをつけるのはちょっとした遊びでもあり、それがまた楽しい」と利根川さん。

それぞれが路上観察で撮った写真は、SNSにコメントとともにアップしたり、Web上のアルバムで共有したりしています。その人がどんなところに魅力を感じたのか、写真にコメントがつくことで楽しさが倍増します。

さいたま市路上観察学会は、これまでにさいたま市の各区で順番に開催され、大宮区を残して9区で開催しました。全10区まであと少しです。

これまでの活動は、さいたま国際芸術祭のプレイベント「Sightama Art Action Exhibition」の展示でも紹介しました。今後は「さいたま市国際芸術祭2020」に合わせて、ワークショップの企画や学会誌の発行なども考えています。みなさんもお気軽に参加して路上観察を楽しんでみてはいかがでしょうか。

(記 三石麻友美・山田 玲子)

Website: <https://www.facebook.com/さいたま路上観察学会>

参考:「路上観察学会入門」赤瀬川源平ほか編、筑摩書房、1986年

萌え点

中央区(2019)



県南水道のマンホール。よく見ると、「弁」の文字に余計な点がついている。少し歩いたところにも同様のマンホールがあったが、その「弁」は普通の字体だった。マンホール(マンホール愛好家)の中ではこの点は「萌え点」と言われているらしい。

Saitama Street Observation Society

本で楽しむ 地下世界

並木せつ子



ふしぎの国のアリス
ルイス・キャロル
評論社 2000年

地下の洞穴の冒険
リーチ
岩波書店 1971年

地底旅行
ジュール=ヴェルヌ
偕成社 1993年

マンホールの蓋に絵が描かれるようになったのはいつ頃だったのか、私が気づいたのは、マンホールの蓋の「写真集」を目にするようになってからです。

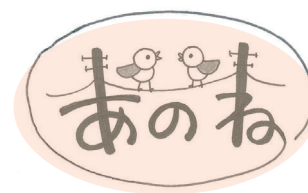
本が先か、絵が先かわかりませんが、下水道などの専門書ではない「マンホールの蓋の本」の始まりは1984年の『マンホールのふた 日本篇』あたりではないかと思われます。その後、1993年に『グラウンドマンホールデザイン 250 選』、2001年に『青森県のマンホールの蓋』、2005年に『路上の芸術』や『マンホールの博物誌』など、徐々に出版数を増やしてゆきます。

飛躍的に増えるのは2014年以降で、『四国のデザインマンホールをコレクション』(2014年)、『沖縄のデザインマンホール図鑑』(2016年)など地域限定のものや、『私の旅とマンホール』(2016年)、『日本一周マンホールの旅』(2019年)のような旅の本など、多様な観点からとりあげられるようになりました。

蓋の先にある地下の世界も、古くからファンタジーやミステリの舞台になってきました。例えば、ウサギ穴に落ちた『不思議の国のアリス』(1865年作)、ヴェルヌの『地底旅行(探検)』(1864年作)、少し新しいものだと『地下の洞穴の冒険』や『ズッコケ三人組の地底王国』など、こちらもたくさんあります。

最近は物語だけではなく、現実の地下世界をとりあげた本も増えています。考えてみれば、人間ほど地下を活用している生き物はいないでしょう。上下水道・地下鉄・地下街はあたりまえ、東京湾アクアラインの海底トンネルや、春日部市にある雨水調節のための首都圏外郭放水路など、枚挙にいとまがありません。こんな地下の世界を紹介した本が『地下をゆく』(イカロス出版、2015年)や『東京の巨大地下網 101 の謎』(宝島社、2018年)です。人工か、自然かを問わず地底を訪ねた本なら『東京洞窟厳選 100』(講談社2009年)。こんな地下もあったのかと奥深い世界に驚かされます。

地面の下は謎の世界、その入り口であるマンホールの蓋に人々が興味を持ったのは、自然な成り行きだったのかもしれない。



よみさんぽ編集委員のつぶやき

人生の節目をあと何度迎えるだろう

2020年春は、新型コロナウイルスが世界中に大きな影響を与え、日本各地ではさまざまな催しが中止、自粛ムードとなった。この時期は、卒業式や送別会、入学式、入社式や歓迎会など、出会いと別れの節目の時期でもある。人生に訪れるいくつかの節目の1つが、次々となくなってしまったのだと思うと、なんともさみしい気持ちになる。

身近でも「袴を用意して楽しみにしていたのに」「先生や友だちとの記念写真が撮りたかった」などの言葉を耳にした。その言葉に思わず何十年も前の卒業写真を、何年ぶりに開いてみた。写真の中の友だちや先生には卒業以来会っていない。元気なのか、何をしているのか、わからないことばかり。それでも、アルバムを開くとその当時に戻り、思い出に浸ってしまう。そんな経験は私ばかりではないだろう。

私は愛媛県で生まれ育ち、大学進学と同時に故郷を離れて34年になる。年末年始に帰省した時に、ひとり暮らしをする高齢の母親がアルバムを整理していた。いわゆる終活の1つようだ。私の知らない若かりし頃の母の姿に、1人の女性として母の人生の歩みを見るようだった。

人は生まれて、その生涯を終えるまでにさまざまな節目を経験する。私にも、そして母親にもあったように……「節目」とは、元々竹や木材の節になっている部分を指した言葉である。表面に節があることで、困難が起きても強く高く伸びることができるのだという。人間もそうした節を経験することで、人生を前に進めていく力になっていくのかもしれない。

人生100年時代と言われ、100人いれば100通りのストーリーがある。さて、私はこの先、どんな節目を迎えるだろう。
(記 大澤 美紀)

水辺の景色

川っぶちの街

子どもの頃の川の印象は、臭くて、濁っていて、コンクリートの堤に遮られた場所にあり、決していい印象はありませんでした。堤の前には何かの工場があって、夕焼けの中に悪魔の象徴のように何本もそびえ立つ煙突。その手前には無機質なコンクリートブロックの塀が立っていて、広い工場を囲っていました。よりによって、工場の周りの道も変にクネクネした道で、昼でも薄暗くて不気味でした。それなのに、違う時代の存在のようなお店や民家がある。そんな場所だったから、川というのはまるで異世界の存在のようでした。

煙突がなくなり

成長して地元の路地裏で遊ばなくなって久しい頃、煙突を見かけなくなりました。工場は稼働していないようですが、クネクネした道は昔のまま。お店や民家はなくなり、そこは同じ外観を持つ家が並ぶ場所になっていました。川に向かう道はよく見かける住宅街に変わり、異世界に行くような怖さは薄れたものの、今の景色が当たり前に見える分だけ、幻を見たような気分でした。

不思議な道

私が住んでいる下町は、大きな川に挟まれた中洲のような場所です。そんな街を歩いて長年疑問に思っていたことが……同じような道路が2本も並行して存在している場所、道路と斜めに交差する路地。混雑時に裏道として使っていたそれらの道が作り出す、不合理にしか思えない街区の形状が不思議でした。

街歩き

縁あって、自分が住んでいる下町の^{あんきよ}暗渠をテーマにした街歩きの企画に参加しました。暗渠の専門家の方の話は、地元のお年寄りも知らないような話も含

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



まれていて、興味深いものでした。暗渠の上に作られた道路には、もともと橋があった場所に小さな起伏があること。下水のマンホールが道路の片側に偏って並んでいる場所は、その反対側がドブ川だったこと。運河が暗渠になった場所には材木屋があることなど、教えてもらわないとなかなか気がつかないような内容でした。

長年の疑問が晴れる話もありました。先程の不思議に思っていた2本の道路が平行に通っている場所は、片方が運河を埋め立ててできた道。片方は元々の道でした。道路と斜めに交差する路地も、もともと水路があった跡でした。

水辺と生活が近かった頃

街歩きの時に通って不思議な場所がありました。自転車がすれ違うことも難しいような路地が2本平行にあり、その間には家々が連なっていました。その家々があったところは運河だった場所で、2本の路地はその護岸でした。護岸だった頃は商店が並んでいたらしく、一部の建物にはその面影を感じます。かつて、運河が道路のように使われ、生活に近い存在だった頃を想像させました。思い出したのは違う時代の存在のように思えた民家や商店。それらがあった場所は、街の中心だったのでしょう。その捻じれが、異世界へ行くような印象を私に与えてくれたのかもしれない。





未来を拓く

つなぐ・つくるプロジェクト・1



やどかりの里はさいたま市で活動開始し 50 年。喫茶店（ルポーズ）、宅配弁当屋（エンジュ）、リサイクルショップ（すてあーず）、農園や印刷屋（やどかり情報館）、いずれも精神障害のある人が働き手です。そして、小さな庭のあるサポートステーションやどかり、市民の皆さんの相談をお受けする生活支援センター（見沼区、大宮区、浦和区）も……まちの人たちにもご活用いただいている拠点が市内に点在しています。

さて、そのやどかりの里が「未来を拓く つなぐ・つくるプロジェクト」（以下、T.T プロジェクト）を開始、この地の宝物さがし、その宝を生かしたみんながつながれる場づくりを考え始めました。首都圏から近く、かけがえのない自然や歴史や文化が豊富なこの地域をもっと多くの人の宝にしたいと思ったのです。

T.T プロジェクトは現在学習会を重ねています。今回は T.T プロジェクトのメンバーでもあり、2月 15 日に話題提供をいただいた丸志伸さん（株式会社ベストワーク、さいたま市在住）の取り組みやビジョンをご紹介します。

農業・福祉・観光を結び付けた「見沼地域 元気化事業」

350 年の重み

丸さんは、350 年続く農家に生まれました。350 年という長年月この地はどんな歴史をたどってきたのでしょうか。当時この地には旧利根川や荒川の乱流が作り出した大きな沼があり、見沼と呼ばれていました。下流域の村々は常に洪水に悩まされていたそうです。そして、1629 年には見沼溜井がつくられ、水害被害から守られた地域もありましたが、片柳方面は洪水で耕地が消失する

丸 志伸さん

1963 年生まれ。学校卒業後は都内の社員教育企画会社に勤務。その後、フリーランスとして活動し、2003 年に人材開発コンサルティング業として株式会社ベストワークを設立。現在はこれまでの仕事を継続しながら、地元・見沼地域の良さを際立たせる事業モデルを構想し、必要な経験を蓄積しながら、農業・福祉・観光を結びつけた事業展開を試みている。



丸志伸さん

などの打撃を受けたのです。それから 100 年、徳川吉宗の命を受け、1725 年から見沼新田の開発が行われていきました。代用水路も作られ、この用水路を船運にも利用し、周辺の村々と江戸を結んでいきました。用水路と芝川との水位差が 3 メートルもあり、2 か所の閘門を設けて水位を調整しながら船を通す方式がとられました。パナマ運河の完成より 183 年も早かったそうです。

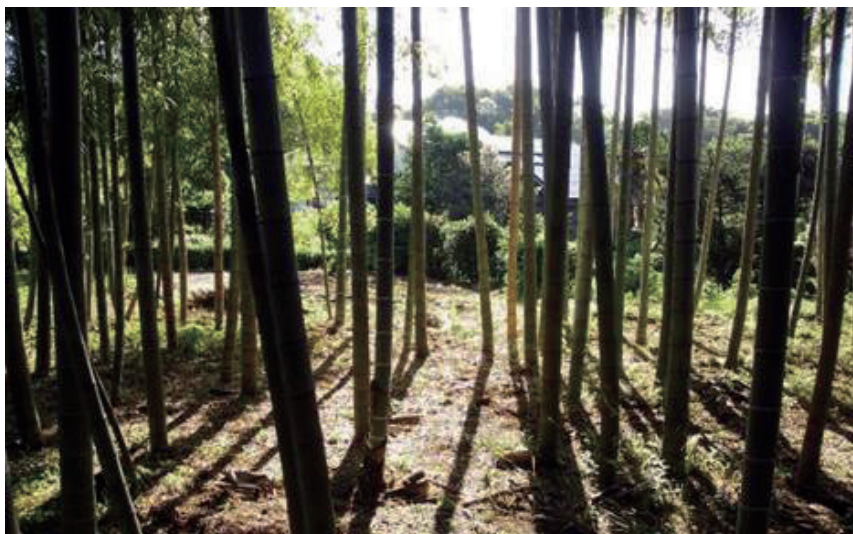
そして、昭和の初めには東京市は見沼田んぼを三千町歩の大貯水池（中禅寺湖 3 倍ほどの大きさ）にするための計画を立てたのです。当時の埼玉県知事は了承しましたが、村の人たちは東京市に対し粘り強く反対運動を続け、この計画は打ち切りになったのです。土地買収による目先の収入よりもこの地で農業を続けることを選択したわけです。この反対運動に見沼田んぼを守る人々の思いが強く伝わってきます¹⁾。

丸さんの代々の先祖も自然との関わりの中で、容易ではない数多の経験を重ねながら、農家としての営みを続けていらしたのだと思います。

時代の流れに歯止めをかける

丸さんの祖父は、村会議員として地元耕地整理を進め、村会議員としてこの地域が働きやすく、住みやすい地域になることを願って尽力された方です。丸さんは、学校卒業後は自身のキャリアアップのために都内でビジネスに従事、ご両親も他界され、これからの見沼地域のことを考え、過去に生きた人の願いが失われることがないようにと強く思うようになったそうです。

丸さんは近年の見沼地域の変化について「昭和 30 年代のはじめにそれまでの米・野菜・果樹の農業に加え、安行地域を軸に植木産業も見沼地域で活発になっていきました。しかし、昭和 60 年代になると都市化、工業化の強い波にさらされ、地元農業の後継者も安定的で高収入のビジネスに従事するように



カフェ予定地隣地の竹林

なっています。そして、農業従事者の高齢化が進み、農業離れは加速し、休耕地や耕作放棄地も増え続けています」と語ります。

そして、このままでは地域としての“らしさ”が失われ、アイデンティティの希薄な地域になってしまうのではないかという強い思いで、都心に近い地の利を活かす「見沼地域 元気化事業」を発案されたのです。

見沼地域の農業・福祉・観光の3つの領域

後継者不足の農業に障害のある人たちの力が生かせないか、と考える丸さん。すでにやどかりの里を始め、いくつかの障害のある人の働く事業所に植木の生産プロセスの一部である「挿し木」を依頼し、いずれは鉢植え（カジュアル盆栽）の生産にも障害のある人が従事できたらと考えています。障害のある人とともに地場産業を守っていこうと動き出しています。カジュアル盆栽の鉢の一部は障害のある人たちが生産したものを活用します。

もう1つの取り組みとして、カフェの経営を計画しています。見沼地域には散策の途中にゆっくり立ち寄れる場が意外と少なく、障害のある人が制作したカジュアル盆栽の展示販売、地産地消の喫茶のメニューなどの提供を通して、見沼の散策客にくつろげる場所を提供したいと考えています。そして、この見沼地域のさまざまな団体とのネットワークを強化し、観光地化を促進していこ



展示販売の様子

うと、地域回遊モデルを提案しています。例えば、レンタサイクルで見沼地域のあちこちに立ち寄り、買物したり、季節ごとに楽しんでいただく……もう一度来たいと思ってもらえる、誰かに薦めたいくなる地域に、そしてこの地に暮らしたいと思う人が増えていったらと考えています。

先達の思いにこころを寄せて

見沼の地は、まさに人と自然が作り上げた地域です。水害と闘い、都市化の波にさらされながらも、この見沼らしさを残すために力を注いでいる人たちがいます。丸さんはまず障害のある人の社会参画とカジュアル盆栽に思いを乗せて、見沼の魅力を発信し始めています。T.Tプロジェクトでは、見沼の宝をもっともっと発見し、この地を思う多くの人や団体とつながりながら新たな場づくりを検討していきます。

（記 増田 一世）



カジュアル盆栽

文献

1) 『片柳のむかし』刊行委員会、大宮市片柳公民館編：一郷土をつづる一片柳のむかし、1988

あなたらしい毎日を。
さいたま市内を中心にビルやマンションを管理する会社です。
ご自身のライフスタイルにあった時間でのお仕事があります。

清掃スタッフ募集中!
ご応募はこちら

今日も 明日も そっと。
毎日興業株式会社

〒330-0842 埼玉県さいたま市大宮区浅間町2-244-1
TEL 0120-156365 (フリーダイヤル)

「もったいない」をつなぐ&「モノづくり」でつなぐる



公益社団法人やどかりの里 **すてあーず**
〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 844-22 TEL : 048-688-8223

こころの悩み、ちょっと話してみませんか?

お住いの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい。

見沼区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-793-6373

***精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です。**

書籍のご案内

JD ブックレット4

障害のある人と優生思想

藤井克徳、市野川容孝、ほか 著

2019年11月2日発行 1,000円+税



やどかり出版 さいたま市見沼区染谷 1177-4 TEL 048-680-1891 FAX 048-680-1894

1食からお届けします! (月~金)

おかゆや
刻み食対応

ご希望の
曜日にお届け

管理栄養士が献立をたて、栄養バランスのとれた食事
昼食 550円/1食

受付 月~金(祝日のぞく) 8:30~18:00 エンジュ
電話 048-**686-7875** 見沼区南中野 286-1

無肥料・自然栽培
ほしいも
農業・肥料・除草剤不使用

やどかり農園 (公益社団法人やどかりの里)
さいたま市見沼区染谷 1177-4 やどかり情報館
Tel 048-680-1891 fax 048-680-1894

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



い ち ず
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部商品を除く)
この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいて女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、貸詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています! 問い合わせ先: 048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL: 048-854-6890 FAX: 048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
●さいたま障害者労働センター(桶川市)
《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ
●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区) ●ひかりホーム(西区)
《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)
●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

記録写真家 柿内未央さん(表紙写真)

“人としていかに生きるか”について考えるなかで、平和の基盤は自然との共生にあると痛感し、埼玉県の名石農園にて自然栽培を学ぶ。

生かされていること、全ての本質が等しくつながり合っていることを感受してから世界が変わり、その一部として生きたいと思うように。

自然とヒト・人と人をむすぶお手伝いがしたく、“自然とヒト”…いのちの記録をメインに活動している。

<http://tomomusubi.com/>

表紙写真によせて

はじめての街 はじめての人
はじめての 出会い

いつもの街 いつものあなた
いつもの わたし
しずかに ふかく みつめてみると
瞬間瞬間 生まれかわりつづけている

あたらしい一日 あたらしい瞬間
はじめまして わたし
(詩・上田芳久)

上田芳久さん

詩人、星を詠む人。自然のリズムに寄り添う暮らしの豊かさや、それぞれが輝き、多様性をくるみながら支えあっているいのちの美しさを表現している。

<http://note.com/hoshiyomi369>

さいたま見沼よみさんぽ 第33号

発行 2020年4月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<https://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里
理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

今号から「まち歩き」をテーマにしたお話をお届けします。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同